

東京都環境審議会企画政策部会（第17回）

平成19年5月31日（木）

都庁第二本庁舎 31階特別会議室 21

小沼副参事 ただいまから東京都環境審議会第17回企画政策部会を開会いたします。

委員の皆様には本日お忙しい中をご出席いただきましてまことにありがとうございます。私、事務局を務めさせていただいております環境局環境政策部の環境政策担当副参事小沼でございます。よろしくお願いいたします。恐縮でございますが、着席にして進行させていただきます。

初めに本日の出席についてお知らせいたします。ただいまご出席の委員は10名でございます。企画政策部会総数18名の過半数に達しております。この会議は正式に成立しておりますことをご報告いたします。

続きまして本日の資料の確認をさせていただきます。お手元にダブルクリップどめで資料を用意させていただいております。頭に会議次第といたしまして1枚、その次に資料1「東京都環境基本計画のあり方について(中間のまとめ案)」、続きまして資料2、今後のスケジュール、参考資料といたしまして、資料1から4まで4種類ございます。ご確認いただきまして、もし過不足がございましたら、事務局までお申しつけください。よろしいでしょうか。

それでは、これからの議事につきましては福川部会長にお願いしたいと存じます。福川部会長、よろしくお願いいたします。

福川部会長 ご苦労さまです。早速始めさせていただきます。

きょうの議事ですが、お手元にある資料1「東京都環境基本計画のあり方について(中間のまとめ案)」の最後の審議です。お手元にある資料は、前回5月24日、その前の4月26日、2回にわたって企画政策部会でご議論いただき、いろいろご意見をいただいたものを修正したものです。4月26日分は24日に修正が出てまいりましたので、きょうは5月24日にご議論いただいたものを修正したものです。これをきょうご審議いただいて最終的な確定版とした上で、この後開かれる総会に報告していく段取りですので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは事務局から資料の説明をお願いいたします。

小沼副参事 事務局より、お手元の資料1「東京都環境基本計画のあり方について(中間のまとめ案)」につきましてご説明させていただきます。この後の議事の時間の関係もございますので、本日の説明は、前回、先週の部会からのご議論を踏まえまして修正をいたしましたところを中心に説明させていただいております。

1 ページをごらんいただきたいと思います。「東京都環境基本計画改定に向けて」という

ことで、総論の部分でございますが、先週のご議論の中で、総論の中で、世界で最も環境負荷の少ない先進的な環境都市の実現を目指すべきといった志を、「改定に向けて」の巻頭で入れた方がいいのではないかというご指摘をいただきました。具体的には第4パラグラフで、「世界で最も環境負荷の少ない先進的な環境都市の実現を目指していく」というところを入れてございます。

6 ページ、7 ページに「東京が目指すべき都市の姿と果たすべき役割」、右側に「目指すべき都市のステップ」ということで記載させていただいております。

この中で、快適性あるいは真の快適性というような表現がたくさんあるんですが、ここについて、いわゆる便利な生活ではなくて、もうちょっと違う都市の快適性という記述をした方がいいというご指摘がございましたので、7 ページの右下に「都市の快適性」とはということで、若干注釈めいてございますが、ここで私たちが目指す快適性を記述してございます。

8 ページ、目標設定の考え方のところでございますが、中ほどにチェックマークが五つほどございます。ご議論の中で、目標のあり方、今後、例えば先進的な取り組みとか技術革新を踏まえて弾力的に見直すことが必要であるということもございますので、三つ目のチェックの最後のところに、「今後弾力的に見直すことも必要である」という記述をしてございます。

14 ページ、15 ページをお開きいただきたいと思います。参考資料としてつけております「気候変動をめぐる世界の動向」でございます。IPCC の報告とか、15 ページの右下、日本の動き、今後の動きのところ、先生方からいただいたご指摘を踏まえて記述を修正しております。

16 ページでございます。具体的な施策といたしまして、気候変動対策のところでございますが、あるべき姿・目標の最初のところでございますが、気候変動回避に向けた求められる対策といたしまして、温度上昇を 2℃ 以内に抑える必要がある。2050 年には、世界全体の温室効果ガスの排出量を 1990 年レベルで半分に削減する必要がある。その中で、日本はそれ以上の削減を求められる可能性があるという記述を冒頭に入れております。

2020 年の中期的目標のところですが、2000 年比 25% という目標、これは前から掲げているところでございますが、ここにつきまして、産業部門、業務部門、家庭部門といった部門別の削減目標も今後検討すべきというご指摘をいただきましたので、今回は大枠で 2000 年比 25% だけになっておりますが、今後、最終まとめまでに提示するよう、ご議論を

いただきながら加えていきたいと思っております。

17 ページ、大規模事業所のところでございますが、サプライチェーンにつきまして、中小企業事業者に配慮した書き方をということで若干修文してございます。一番下の方、家庭における省エネ対策として、機器面だけではなくて、消費生活全般からのアプローチが重要というご指摘をいただきまして、具体的には 2 段落目の「また」以降、各家庭における消費のあり方を見直すような取り組み、あるいは住まいや食事、買い物など、そういった日々の生活の中でエネルギーについて考える、また、生活の転換を促すような施策展開を記述してございます。

20 ページの下、既存の建築物の省エネ改修でございます。今後、既存の建物につきましても、耐震改修などと合わせて省エネ改修をすべきというご指摘をいただきました。その辺を、既存の建築物における省エネルギー改修の推進ということで新たに追加記載をしてございます。

21 ページから 22 ページにかけてでございますが、フロン等その他、温室効果ガスの対策のところ、ノンフロン化への推進について記述を加えさせていただいております。

ヒートアイランド対策でございます。後ほど、緑、水の部分でもヒートアイランド対策が出てきているんですが、ここでも前振りとして記述を加えてございます。

23 ページ、適応策のところでございます。もう少し書き加えてというご指摘をいただきまして、適応策について検討あるいは対策が必要になるという記述を加えてございます。

25 ページ以降が環境交通の部分になります。全体構成の順番でございますが、27 ページ以降、それぞれ施策のあり方・方向性、1「交通行動の変革(自動車への過度の依存からの転換)」から始まってまいります。順番として、自動車に依存しないのが先だということで、こちらを先に持ってきて順番を若干変えてございます。

交通行動の変革の上のところになります。ライフスタイル、消費行動への言及、少し記述を加えてございます。

31 ページ、自動車の環境性能向上のところ、ハイブリッド自動車の記述がございましたが、その他の記述が弱かったものですから、水素あるいは燃料電池、そういったものを踏まえての記述を、最後の 3 行を書き加えてございます。

60 ページが、三つの都市のステップの最後の、緑と水の部分になります。導入部分、「しかしながら、その成果は十分とは言えない」、その次に、緑と生物の多様性が非常に重要であるということ、ご指摘を踏まえまして、「自然環境を再生し、生物多様性を確保して、

豊かな生態系とともに次世代に引き継いでいく」という記述を加えているところがございます。

62 ページの一番下、緑につきましてもライフスタイルの記述を加えていただきたいというご指摘をたくさんいただきました。緑を身近に楽しむライフスタイルの普及ということ、一方で屋敷林や雑木林など樹林地の所有者はその維持に苦慮している事態、もう一方では、市民農園を初めとして、緑地の維持など人気があって、ボランティアで参加する人がふえている。緑を楽しむことができるライフスタイルが広まって、より一層都民という感じで記述を加えてございます。

66 ページ、2「うるおいのある水辺環境の回復」につきましても、水辺のあり方につきまして、地元の市民あるいは区市町村との連携が非常に重要になっているというご指摘を踏まえまして、「近年」以降のところ、中小河川あるいは運河、こういったところで都民、区市との連携を進めていくべきという記述を加えてございます。

87 ページ、連携とかムーブメントのところ、「都民、国民、世界の人々を巻き込むムーブメント」の部分でございますが、先生方から、都に対策として求められるのは具体的数字の云々よりも、枠組みづくりあるいは仕組みづくり、戦略的取り組みが必要なのではないかと、そういうところを積極的に出すべきというご指摘をいただきまして、「今後」から「戦略的環境広報のあり方」までの導入部分をすべて加えて記述させていただいているところでございます。

その他、若干修文した点等ございますが、本日、時間の関係で、ご指摘をいただいて大きく変更した点だけをご説明させていただきました。以上でございます。

福川部会長 ありがとうございます。それではご意見をいただきたいと思います。これをまとめまして、4 時からの総会に諮ります。したがって 15 時 50 分ぐらいまで議論をさせていただきたいと思います。

きょういただいた議論は、これを直すというよりも、この後また議論が再開されますので、そのときに、いままでつくったものの全体を眺めてみて、必要なこともあるなというふうに出していただくと助かると思います。

それではご意見やご質問を出していただければと思います。

最初の「改定に向けて」が少し変わっております。お休みされた方はご存じないかもしれませんが、とりわけ前回大きな議論がありましたのは 5 ページから、そして、目標のところ、改めて議論が沸騰いたしました。CO2 関係、気候変動あたりに関してご意見、ご質

問をお願いいたします。

堀委員 気候変動ということで、9ページの図が気になったんです。誤解を招きかねないかなと思ひまして、40万年というところで、予測が瞬間的になっていますので、もし可能ならば、図を差しかえて短くするか、あるいは予測の中で、これは何もしないときの予測だと思ひますが、イシューを入れたときはもう少し低くなると思ひますので、幾つかある図の中で、適切なものを選んでいただいた方がいいのかなという感じがしました。

福川部会長 これについて事務局の方で何かご意見ありますか。

小沼副参事 本日の総会には間に合いませんが、IPCCで皆さんの合意を得ているパターンが何パターンかございますし、そういうところを見まして、変な誤解を与えない、あるいは近年に近づくに従ってどんどん環境が悪化している、気温が上がっているということがわかるような図を探してみます。

福川部会長 きょうはこれでいきたいと思ひますが、ほかにいかがでしょうか。

前回から本日までの修正は、先週木曜日にやりましたので、週の後半からきょうにかけて直していただいておりますし、その後、メールやその他で、月曜日までご意見をいただいて直したものです。根本的に直すというよりは、ところどころ絆創膏を貼ったみたいな直し方になりましたが、そういう事情もありましたのでお許しいたいて、ご意見やご質問をください。

太田委員 何回か来ていないので十分理解していないかもしれませんが、17ページのところで、家庭での省エネの本格的な推進ということで、ライフスタイル的なことを入れていただいたのは大変いいと思ひますが、2段落目で「消費のあり方を見直すような取り組みが必要である。住まいや食事、買い物など、日々の生活の中で」、この意味ですが、交通という言葉が直接入っていないんですが、食事、買い物などの交通という意味なのか、買い物をする対象がエコラベルのついたものが欲しいという種類の話なのかということと、私たちは、いろいろな省庁の、運輸部門、何とか部門とあって、最後に足し算して家庭ということで、交通も大事ですよと、家庭の中での交通ですね、ということもありますが、できれば交通が、前のエネルギーの統計で、図があったときには、これは全国の話ですが、東京の話じゃありませんが、マイカーが53%ぐらいということがありまして、その節約が非常に大きいですよ。

交通のあり方、車の使い方ということが非常に大きいので、こういうところはセクショナルリズムといいますが、家庭だ何だという伝統的な割り方ではなくて、そういうライフス

タイトル全体に交通の仕方もというような表現、買い物も、買い物をする場所の話と買い物をする内容両方あるんだったら、きちんと書き分けておいていただいた方がいいかなというところが一つです。

20 ページの、都市づくりの中の CO2、全体の流れがまだわかっていないんですが、都市づくりで中長期的な話に入っていましたよね。そうだとすると、これから新たに立地する部分あるいは再開発でやる部分、そこでコンパクト化するとか、土地利用の形態、立地のことをもう少し考えることがあるとすれば、21 ページの「地域におけるエネルギーの有効利用」でしょうか、その辺が明確に書いてないような感じがするので、これからの都市構造的なものに対して、そういう意識で開発許可あるいは建築基準の適用をしていく必要があるんじゃないかということは、今後の検討課題の中に、もしほかに入っていないとすれば入れていただきたらと思います。

福川部会長 どうもありがとうございました。17 ページは新しく書き加えていただいたところですね。前回、ライフスタイルの変更が求められているのだということをもう少しはっきりわかるように直した方がいいのではないかというご意見があちこちから出まして、一つが 17 ページの「家庭での省エネの本格的な推進」というところでした。

ここには、家庭で使う電気製品の省エネラベル化とか、そういうことが主に書いてあったんですが、機器に頼るだけではなくて、使い方とか、物を買うとき、そういうときに、あるいは日々生活しているときにどれだけ CO2 を排出しているのかということを感じながら生活できるようにしたらいい。それは下のところに既に書いてあったんですが、そういうことを含めて、ライフスタイルに言及してはどうかというご指摘があった中でつけ加えていただいたものです。

事務局では、ライフスタイル論を前面に出す記述の方法にやや抵抗感があったようですが、皆さんの意見を聞いて入れたものですが、入れますと、確かに太田先生がおっしゃるように、中身が一体何なのかということにもなってきますが、きょうのところはこれでしょうがないと思いますが、さらに最終計画に向けて、変えるところがあれば変えていくのかなという気がいたします。

20 ページからの都市づくりの中での CO2 削減も、経過を忘れましたが、都市づくりと言ったので、太田先生がご指摘になったんでしょうね。この中に書いてあるのは、都市づくりというよりは都市開発、都市開発プロジェクトの方がもっとはっきりしたかな、そのことを対象にした内容が主に書いてありまして、住宅のことも書いてあるんですが、都市づ

くり全般は別の項目にと考えた方がいいですか。その辺いかがですか、事務局。

小沼副参事 20ページの都市づくりのところでございますが、先生から冒頭ありました、都市開発のときにもっとCO2を削減する取り組みを開発業者に求めるとか、そういう視点から書いてきたところでございます。

もう一方、分科会でも1年間検討いただいたところがございます、76ページ以降、横断的、総合的施策ということで、一つは環境都市づくり調査会で検討をいただいたところでございます。ここにおきましては、都市づくり、都市活動全般において総合的、横断的な環境への配慮が必要である。そういった枠組みが必要だと。都市基盤整備など大きいハード整備の段階あるいはさまざまな都市活動の場面、それぞれの中で環境配慮も内在化させるといいますか、盛り込ませるといいますか、施策として組み込んでいくことで、あらゆる分野で環境対応を図っていく。総合的、横断的なところではこういう記述をしておりまして、個別対策としましては、20ページで、都市計画づくりあるいは地域計画、そういった段階での、一緒になって環境配慮をやっていこうよという書き方にしております。

最終まとめに向けて、後ろの方の横断的、総合的施策、今回は報告をコンパクトにまとめた形で載せておりますので、その辺の記述も含めまして検討していきたいと思えます。

福川部会長 というよりは、コンパクトとかシュリンクとか、そういうお話をご指摘されたような気がいたしますが、それはむしろのところとか、あるいはシュリンクのことがどこかに書いてありましたね。

小沼副参事 3ページを開いていただきますと、シュリンクポリシーという意味では、3ページの一番下のところに、ヨーロッパでよく言われるシュリンクポリシーを記述してございまして、一つの都市のあり方の、いわゆる創造的縮合政策ということで、都市のあり方が見直されるときに一緒になって環境配慮を見せていこうと、そんな感じで若干ここでも触れています。

福川部会長 明示的に、例えば既にある郊外住宅地を緑に変えるとは書いてないんですが、後ろの方で緑地に関しては書いてあるということで、その辺は今後の検討ということにさせていただきたいと思えます。

ほかにいかがでしょうか。お願いいたします。

末吉委員 7ページのイメージのところですが、議論が確かにあったかと記憶しておりますが、「目指すべき都市へのステップ」の最後のところに「成熟した」という言葉があるんですが、これから社会がどんどん大きく変わっていく、目標も非常に弾力的になっていく

としたら、これで成熟したんだと言えるステージはひょっとするとないのかもしれないと思います。

さらにその上に「世界の諸都市の範となるような」とか、世界での都市目標をつくっていくんだとすると、成熟したというイメージが、そういうところで受け入れられるのか、共通の成熟感というか、成熟度があるのかしらと改めて思っていました。

新しい計画自体を表現するキーワードとして、例えば成熟した持続可能な都市の実現を目指すんだということがどこまでアピールとして出るのかなという気もしているものですから、最終的にこのところの目指すべきものが、もう少し躍動感のあるような表現というか、言葉が何かないのかなと思っているところです。

福川部会長 右の方は成熟した持続可能都市の実現、左の方にイメージ、少ないエネルギー消費で快適に活動・生活できる都市を目指す、こちらは普通の表現ですが、この辺は、環境局のこれまでのレポートは、何とかの挑戦とか、非常にキャッチフレーズが上手だったんですが、今回はそこには精力をほとんど注いでいないようでありまして、できるだけ普通の言葉でやっついこうということだろうと思います。

表現はともかくとして、問題は内容ですよ。そういう意味では、「成熟した持続可能な」という言い方、世の中で一般的に使われているので、あまり疑問もなくおつくりになったと思いますが、改めて見てみるとよくわからないのも確かなような気もしますが、ほかの方、ご意見ありますか。きょうは直せませんが、今後の議論に向けてご意見がありましたら。特にないですか。

事務局、何かありますか。

小沼副参事 この辺の都市のステップ、最終段階ではないのかもしれませんが、ある意味一つの到達点として、この部分がキャッチコピー的になると思っています。何という表現がいいのかというところでは、おっしゃるとおり、今の段階ではまだ練れてないところがございます。私どもも知恵を出しますが、先生方も、最終まとめに向けて、こんなすてきな言葉を出していただければ助かります。

福川部会長 言葉のことをおっしゃっただけではなくて、内容的に躍動感ある、成熟と言うと年寄りめいた感じがあるといいいますか、成熟の先はすぐ老いちゃうので、それじゃ先がないみたいですから、少し考えなきゃいけないのかもしれませんが。

ほかにかがででしょうか。

市川委員 関連して。1ページの、新しくつけ加えられました4段落目のところ、世界の

人々との共通の未来を築いて、大胆でスピード感のある戦略を展開していくということで、このイメージが、先ほどご指摘された、成熟した持続可能な都市の実現とフェーズが合えばいいのかなと思いました。

福川部会長 一生懸命つけ加えていったものですので、全体の調整はこれからだんだんよくなっていくと思います。

ほかにいかがでしょうか。

藤井委員 87 ページの最後のところの「今後かつてない」云々の頭の部分ですが、文章がすっきりしないですね。行政が旗を振りますよということを強調されているように読めるんですが、流れで言えば、もちろん行政の役割を書いているわけですが、連携でやっていくわけですから、NPO、事業者、都民の、2 コマ目は、それぞれの行動を起こす意義云々かんぬんを、行政が意欲を引き出して、行動を具体的に示すと書いているんですね。むしろ自発的な動きをサポートすることで連携を深めていくようなニュアンスの方がいいと思うんです。

その次も、中身は、そのための具体的な施策を書いておられるつもりでしょうけれども、同じような感じのことを書き連ねているように思うんです。最後は、最初の文章を入れかえた程度の話になっているように読めるんですよ。最後の方なのでまとめたところになるので、都の主体的役割は、ここに出てくる環境広報なり情報発信等で非常に大事なんですが、土台の部分は都民、事業者、NPO、区市町村、全体の連携を踏まえたものが、東京の価値というものの位置づけになると思うんです。それを発信する役割を担っているのが都であるという流れが読めるような表現の方がいいのではないかなという気がいたしました。

福川部会長 この追加のきっかけになったのは藤井委員のご発言でしたっけ。

藤井委員 ちょっと覚えていないんですが。

福川部会長 都の果たすべき役割は、あまり細々としたことを、それも重要ですけども、枠組みのようなものをしっかり示していくことが重要ではないかというご発言で加わったものだと思います。

藤井委員 都の役割は、多様な活動を、まさに連携パートナーとしてまとめて推進していく、そして発信していくことなんだということですよ。だから、都が行動の具体像まで、こうしなさいよ、ああしなさいよというところまで出していくのは、それをもって東京の価値としてのムーブメントは、都主導型の印象が強くなりすぎると思われますが。

福川部会長 直したらますます、そういう印象を持っているだけではないですね。

藤井委員 文章なんですよ。文章として、最初のところにはそれぞれの主体のことを書いておられるわけですね。行政に求められる役割として書いておられるわけですが、意欲を持った都民とか、意欲を持つべき都民がやる行動を都が示すのではなくて、それをサポートする立場ですよ。あるいはそうじゃない人については、場合によっては引っ張っていくことになるのかもしれませんが、そういったものを連携の中で進めていく行動を、東京都としては、都民には当然ですが、世界にも発信していくという位置づけだと思います。都だけが前に出ようとしている、そんなことはもちろんないんですが、文章として、そのように読まれるんじゃないですかということです。

福川部会長 わかりました。事務局からご意見ありますか。

小沼副参事 ここはムーブメントを書いていますので、先生が今おっしゃったように、最初の段落で、それぞれの主体がそれぞれ大きな役割を持ってやっていただきたいということをまず一つ書いてございます。

ここに書き加えた理由としましては、前回のご議論の中で、都が自分たちでやっていくことも大事なんです、都に求められる役割として、みずから都が率先してというところをどういう表現にするかわかりませんが、都が枠組みを巻き込んでついたり、あるいは周りのNPOとか事業者を巻き込んで仕組みづくりをしたり、ダイナミックな役割があるのではないかみたいなご指摘をいただいて、2段落目以降、文章はこなれていないところがございしますが、前面に出るプラス巻き込んでいくんだみたいな感じで書いたところではございますが、修文はいたしたいと思います。

福川部会長 きょうはしないでしよう。

小沼副参事 はい。最後に。すみません。

福川部会長 これは重要なポイントですから、これをうまく書ければよくなっていくと思いますので、最終的な結論に向けて直していければと思います。ダイナモか触媒がよくわかりませんが。

河口委員 緑のところ、60ページですが、生物多様性ということで、最初の枠のところ、下から3行目、「生物多様性を確保して豊かな生態系ともども」と入れていただいていると思うんですが、緑があれば生物多様性が確保できるように思われて。緑の質が問題なんですね。何でもかんでも緑だったら、今、問題になっているのは、在来種でも、海外でも、早く育つからこれでいいやということが日本の生態系を崩していることが問題になってい

る部分もあるので、現状で、緑の質に言及されているんですが、生物多様性に配慮した緑、雑木林とか里山とか、昔からある生態系というので、最近、マンションとか建物を建てると緑をつくらなきゃいけないということなんですが、日本の風土に合っているか合っていないかわからないけど、見た目が美しい、いろいろな在来の新しいものをどんどんやっていたりして、緑でありさえすればいいのかなというところが、今ではもうだめだと。

例えばセキスイハウスが今やっているのは、おうちを建てた人に、5本の木を植えましょうと。その土地に合った木を、学者と組んで、ここだったらこういう生態系だから、この木を植えましょうということで5本植えるということをやっているんですね。

今後、都市計画を考えて、緑ということがあった場合に、東京のこの土地に根ざした植生に戻してねというようなメッセージをどこかに入れていかないと、単なる量の緑がいいということになってしまうし、今度のサミットで、生物多様性は、温暖化と並び称してテーマとして挙げられますので、そういう形で、あと2~3行でいいと思うんですが、質というところに入れていただければと思います。

福川部会長 そのとおりだと思います。ちょこっと入れるよりは、質のあたりでもうちょっと書いてもいいのかもしれない。きょうはすみませんが、今後の課題ということでいきたいと思います。

ほかにいかがでしょうか。

平田委員 先週の意見をほとんど反映していただいているようで結構だと思いますし、議論があった長期目標についても弾力的に見直す必要性を書かれているので、現時点ではこんな形でいいのかと思って、そんなにこだわっているわけではないんですが、1点確認を含めて、16ページのところですが、上の、あるべき目標のところでは、表現は変わっていないと思いますが、2050年に少なくとも現在の半分以上となっているんですが、一番下にある2000年比25%削減すべきという目標とは質が違って、少なくとも東京都としては2000年比25%の約束というのは明確な数値目標の位置づけであるのに対して、2050年はあるべき姿勢に表現しているのかなと思います。ところが、施策のあり方を見ますと、1行目の後半から鍵括弧つきで、「少なくとも半分以下にしなければならないという長期的な目標」と、こちら東京都の数値目標かのように書かれているので、その位置づけ、2000年比25%との違いというんですか、既に東京都の確定的な目標かのようにも見えるものですから、その辺少しわかりやすく整理した方がいいのかなと思いました。弾力的に長期目標を見直すべきと、そもそもの目標設定のあり方に入れていただいているので、ここに括

弧つきで確定的に見えるようにするのは、後で難しくなったりするんじゃないかということとでちょっと気になったので、どういう位置づけか確認できたらと思います。

原沢委員 前回発言しました 25%という目標の話と、それを詰めるいろいろな対策を少し定量的にという話をして、ある方からご意見をいただきまして、考え方がおかしいというわけじゃないけど、バックキャストの考え方でやっているんだというお話があったんですが、今回の場合はこれでいいと思いますが、今のお話と関連するんですが、8 ページに、目標設定についての考え方ということで少し詳しく書いていただいているんですが、ちょっと気になったのは、バックキャストをこの段階で出してきて、あくまでも高い目標を立てて、みんなで合意して、がんばろうということ、それはそれでいいんですが、結局どこに返ってくるかということ、東京都がいかに対策のところ結びつけるかということにつながってくるわけでありまして、そういう意味では、目標とは、後で書かれている、どちらかという積み上げ方の対策的なところとちょっと乖離があるかなと。

これは仕方のない話だと思いますが、国の環境基本計画でも、長期を見て、短期をしっかりやるという話、整合をとっているかと思うんですが、そういう意味では、目標の設定のところと、私が気にしている、今回の場合は分野別の削減目標については云々というところで、対策の中身とリンクできている感じができたのでいいと思うんですが、目標の考え方のところで、バックキャストを全面的にやると、現状から考える方法の延長ではなかなか将来に結びつかないのをどう説明するかという説明が書いてないので、それを将来に残すのかどうかというところが一つ大きな判断だと思いますが、なかなかそれは難しいので、我々も、2050 年で半減するようにやっていますが、バックキャストは、目標設定をするのはある意味簡単ですが、そこをつなぐ対策の連続、対策の組み合わせをするのが非常に難しく、現段階では考えられないような将来的な対策も入れないといけない。例えば CCS とか。そうなってくるとバックキャストがちょっと浮いてきちゃうかなと思うので、この辺の表現を少しご検討いただければいいと思います。

今回まとめていただいたのは、わりあい私の意見も入れていただいていますし、ある意味、対策をうまく組み合わせていくことによって目標に近づけるという定量的な話も今後やりますよと書いてありますので、私はそれでいいと思いますが、目標の設定の考え方のところと後ろの方のリンクが少し難しいかなという感じがしています。

福川部会長 ありがとうございます。ほかに、これに関連してご意見のある方いらっしゃいますか。

末吉委員 全くおっしゃるとおりだと思いますが、一方では、79 ページの経済的手法のあり方には、市場経済の中に、プライスメカニズムの中に新しいものを組み込んでいくんだと、これはリニアな考え方じゃないですよ。非常に大きくステップを切る手法を取り入れるということですので、やはりバックキャストという表現は残して、そのことをベースに考えたときに、リニアじゃないステップを切る新しいコンセプトも入ってくるんだというような議論の根拠になるんじゃないかと私は感じるんですが。

福川部会長 現実にと考えると難しいけど、考え方はそうやっていかないと、新しい手段は出てきませんよね。目標のあたりはよろしいですか。

事務局の方で、今いろいろあったことに関連して何か。

大野部長 2020 年の目標と、2050 年のあるべき姿の捉え方は平田先生がおっしゃったこととございまして、2020 年はかなり確定的にやっていこうと思っています。したがって、これについては分野別、全部これを積み上げるという意味ではございませんが、どうやっていくかという具体的なプログラムのようなものを考えたいと思っています。

2050 年の方はもう少し未来的な話でありまして、そこまで全部詳細に、これをどうやっていくかという話を直ちになかなか描けないというところだと思いますが、それはバックキャストの話とございまして、単に2020年だけを念頭に置いて施策を考えるのではなくて、2050年にどうつながっていくかということを念頭に置いてやらなきゃいけないという趣旨でございます。

16 ページの目標という意味は、2020 年の目標と言葉がダブって少し慎重さを欠いたかもわかりませんが、意味合いとしてはそういうことであります。

バックキャストで立てた高い目標を、どうフォーキャストでやっていくかというのが一番難しいわけでありまして、ここはみんなが悩んでいるところでありまして、我々も一緒に悩みながら検討していきたいと思っています。

福川部会長 そろそろ時間がなくなりましたが、これだけはというご意見がありましたら。

藤井委員 議論としてはバックキャストと言いながら、バックキャストについては何も書いてないわけですよ、中身は。ですから、高い目標だというような意味ではあったほうがいいという議論が出るけれども、個々の対策と全くつながっていないので、残してもいいんですが、別に書かなくてもいいんじゃないかなというような気がするんですよ。印象ですけどね。

これがキーワードで、これがなければ全体が動かないという話では全くなくて、しかし、バックカスティングと言いつつ、2050年のところが非常にボヤッとしているわけですよ。より厳しくということだけであって。これは感想ですが。

福川部会長 半分以上求められるとか、その辺はすべてバックカスティングから出てきている数値ですので。

原田委員 8ページの一番下に言いわけが書いてあります。言いわけというか、今回はこういうことだと。その上にバックカスティングということも必要だと書いてあって、これは8ページの下に書いてある形でまとめられているものだけでも、例えば交通メニューがたくさん並んでいるということで、本当にこれでどうやって50年にどうするかというところまで行ってないんだけど、バックカスティングが本当に必要だとなったら、これの強弱をつけて、みんなが反対するようなことも非常に強く押し出すようなことをこの次にやらないといけないと思うので、そういう意味では。

藤井委員 そういうふうに書いたらいいと思う。

原沢委員 バックカスティングは残しておきたいと僕は思います。

福川部会長 私も残った方がいいかなと思います。そろそろ議論を終わらせていただきたいと思います。

多数の貴重なご意見をありがとうございました。今いただいたご意見は、これからまた始まる今後の最終まとめ案の検討の中に反映しながら生かさせていただきたいと思います。

中間のまとめ案に関しましては、今配られました資料1をもって報告させていただくことにいただきたいんですが、よろしいでしょうか。それでは、これを中間のまとめ案として総会で報告させていただきます。今ご発言できなかった方、総会でご発言いただければと思います。

それではこれで企画政策部会は閉じまして、これ以降については事務局にお任せしたいと思います。よろしく願いいたします。

小沼副参事 ありがとうございました。部会終了後、5分程度の休憩を挟みまして、4時を目途に第30回総会を開催したいと思います。総会におきましては、福川部会長から中間のまとめ案を部会報告としてご報告いただきたいと思います。

資料2の今後のスケジュールについて簡単にご説明させていただきます。

本日平成19年5月31日、ただいまの企画政策部会の後、4時から環境審議会で中間のまとめのご報告をいただきます。その後、予定といたしまして、6月6日から1カ月を予定

しておりますが、都民意見を募集したいと思っております。都民意見をまとめまして、また先生方にお示しできるのが7月下旬ぐらいになろうかと思っております。企画政策部会を再開いたしまして、最終まとめに向けたご審議をいただければと思っております。

その後、冬ごろを目途にいたしまして最終のまとめ案のご報告をいただき、環境審議会の答申として私どもにいただければと思っております。区市町村からの意見聴取を踏まえまして、行政計画としては平成19年度内に環境基本計画の改定を行いたいと思っております。以上でございます。

それでは、これもちまして第17回企画政策部会を閉会いたしたいと思っております。どうもありがとうございました。